研究ノート

飛騨・安国寺薬師堂の薬師三尊像の調査
―公開講座で実施する新しい試み―

Investigation of The Yakushi triad（Yakushi with two flanking bodhisattvas）at Ankokuji Yakusidō in Hida

小野佳代*
Kayo ONO

キーワード：安国寺　未指定文化財　仏像　薬師三尊　横河古刹
Key words：Ankokuji Temple, Undesignated cultural property, Buddhist statues

要約

2023 年 3 月 29 日に岐阜県高山市の安国寺薬師堂の薬師三尊像の調査を行った。現在、この三尊像は未指定であるが、調査の結果、南北朝時代末から室町時代初頭にかけて製作された中世の仏像であることが明らかとなった。もとは横河古刹の本尊だった像で、戦乱期に横河古刹が焼失し、仏像のみが安国寺に移され、600 年以上にわたって人々から信仰され、守られてきた像である。仏像を後世に伝えていくには、地域の人に興味・関心をもってもらうことが欠かせない。そこで今回の仏像調査では、調査の一部を地域の方々に公開するという、従来行われていない形で実施した。この点において、この取り組みは地域の眼を文化財保護に向ける新しい試みであったといえよう。

abstract

On March 29, 2023, I investigated three statues of the Yakushi Triad at Ankokuji Yakushidō in Takayama City, Gifu Prefecture. Currently, these statues have not been designated as cultural properties, but our research has revealed that they are medieval Buddhist statues made from the end of the Nanbokucho period to the beginning of the Muromachi period. These three statues were originally the principal images of the Yokawa Ancient Temple. The temple was burnt down during the war, and only the Buddhist statues were moved to Ankokuji. Since then, these statues have been worshiped and protected by people for over

＊東海学園大学人文学部人文学科

600 years. In order to pass on Buddhist statues to future generations, it is essential that local people take an interest in them. In this survey of Buddhist statues, part of the survey was made open to the public. It can be said that this was a new attempt from the perspective of protecting local cultural properties.
These two statues have not been recognized for their values as cultural properties. In other wor.

はじめに

2014年4月に愛知県名古屋市に所在する東海学園大学人文学部に着任して以後、約10年にわたって地域の仏像と向き合ってきた。現在は科学研究費補助金・基盤研究（C）の課題「愛知県の仏像に関する調査研究―伝播と移動に注目して―」(2022～26年）に取り組み、愛知県や岐阜県の仏像調査に奔走中である。そんな中、2023年1月に岐阜県高山市にある臨済宗妙心寺派の古刹、安国寺の住職・堀祥岳師よりお手紙をいただいた。その内容は、①安国寺薬師堂に安置される、現在未指定の本尊薬師三尊像の調査依頼であった。また②調査が可能であれば、その一部を公開講座として、たとえば「仏像調査ワークショップ」などの講座として実施できないかとの相談であった。住職の堀祥岳師は、私が23年間通った早稲田大学の大学院時代の助手仲間でもあり、また仏像調査を公開で実施するのも斬新な試みであることから、調査をお受けすることにした。

調査は2023年3月29日に、こくふ歴まちネット主催「国府遺産コミュニケーター」養成講座の一環で行われた。講座タイトルは、「安国寺薬師堂薬師三尊像の調査―未指定文化財調査の現場に立ち会う―」である。講座の時間は10：00～11：30の90分で、仏像の法量測定、品質構造、保存状況の確認を公開で実施した。講座後に写真撮影を行い、16：00頃に調査が終了した。

一、高山市安国寺の歴史について

安国寺は岐阜県高山市国府町西門前に所在する臨済宗妙心寺派の寺院で、太平山と号す。足利尊氏・直義兄弟が暦応元年（1338）頃から貞和年間（1345～50年）にかけて諸国に建立した安国寺の一つで、本寺院は飛騨国の安国寺に当たる。この場所には以前より少林寺があったとされ、その寺の名を安国寺と改め、貞和3年（1347）に京都南禅寺より瑞巌光和尚を迎えて開山とし、安国寺は開創された。文安2年（1445）には飛騨国で唯一、諸山の位となり、宝徳元年（1449）には十刹（五山制度に基づく寺格の一つで、五山に次ぎ、諸山の上に位置する）に列したほどの由緒ある古刹である。

最盛期には七堂伽藍と九つの塔頭を有したという。ところが戦国時代、天文年間（1532～55年）と永禄年間（1558～70年）の二度に渡る兵火にかかり、経蔵、開山堂、鎮守社の熊野神社以外の

堂宇が焼失してしまった。江戸時代初期の寛永元年(1624)、飛騨高山藩第三代藩主の金森重頼は、中興開山として南叟大和尚を迎えて寺院を復興に導いた。現本堂はこの時に再建されたものである。

安国寺には多くの文化財が現存する。応永 15 年（1408）に建立された経蔵は飛騨唯一の国宝建築で、内部の輪蔵は国内現存最古の遺構とされる。その他、鎮守社の熊野神社本殿（室町時代末）と開山堂の塑造瑞巌和尚坐像（1392 年）が国の重要文化財、本堂の木造釈迦三尊像は仏師定範らが延文 2 年（1357）に製作した像で、岐阜県の指定文化財となっている。このたび調査した薬師堂の木造薬師三尊像は現時点で未指定文化財である。

以下に調査した結果を記す。

二、薬師堂薬師三尊像の調査結果

図 1　薬師堂薬師三尊像　全体

〔形状〕

1. 中尊　薬師如来坐像（図 1～8）

螺髪旋毛形（右旋）。肉髻珠・白毫相をあらわす。耳朶環状。三道相をあらわす。裙・覆肩衣・衲衣を着ける。覆肩衣は背部から右肩に懸かり、右胸下で一旦衲衣にたくし込まれる。衲衣は左

肩をおおって、背面をめぐり、右肩に少しかかって正面にまわり、端を折返して再び左肩に懸け、背面に垂らす（左胸前に衣の折返しをつくる。左腹前辺で下層の布の一部を引き出して上層の布の縁に懸ける）。裙は腹部に上端をのぞかせる。両手屈臂、左手は膝上に置き、第三・四指を軽く曲げて薬壺をのせ、右手は掌を前に向けて五指を伸ばす。左足を衣に包み、右の太腿の上にのせて趺坐する。

2. 左脇侍 日光菩薩坐像（図9～15）

高髻（欠失）。天冠台（上下に紐状）を彫出する。天冠台は正面中央で下方に入り尖る。頭髪は毛筋彫り（天冠台より下の地髪部は束目入り）。鬢髪（びんぱつ）一条耳をわたる。天冠台の左右前方で各髪束を絡ませる。耳朶環状。三道相をあらわす。裙・衲衣を着ける。衲衣は左肩をおおって、上縁を大きく折返して、背面から正面にまわり、再び左肩に懸け、背面に垂らす（右胸前に衣の折返しをつくる。左腹前辺で下層の布の一部を引き出して上層の布の縁に懸ける）。裙は腹部に上端をのぞかせる。左手は屈臂し、胸前で未開敷（みかいふ）蓮華の茎を握り、右手は垂下して掌を正面に向けて五指を伸ばす。両足をやや開いて蓮華座上に立つ。

3. 右脇侍 月光菩薩立像（図16～22）

高髻（欠失）。天冠台（上下に紐状）を彫出する。天冠台は正面中央で下方に入り尖る。頭髪は毛筋彫り（天冠台より下の地髪部は束目入り）。鬢髪一条耳をわたる。天冠台の左右前方で各髪束を絡ませる。耳朶環状。三道相をあらわす。裙・衲衣を着ける。衲衣は左肩をおおって、上縁を大きく折返して、背面から正面にまわり、再び左肩に懸け、背面に垂らす（左胸前に衣の折返しをつくる。左腹前辺で下層の布の一部を引き出して上層の布の縁に懸ける）。裙は腹部に上端をのぞかせる。左手は肘を軽く曲げて垂下させ、第一・二指を捻じる。右手は屈臂し、掌を正面に向けて第一・二指を捻じる。両足をやや開いて蓮華座上に立つ。

〔法量〕（単位cm）

1. 中尊　薬師如来立像

像　高　38.0（一尺二寸五分）

髪際高　33.2（一尺一寸）

頂―顎	13.8	面　長	8.9
面　幅	8.5	耳　張	9.8
面　奥	10.6	胸　奥	13.1
腹　奥	13.8	肘　張	27.8
膝　張	31.9	膝　奥	22.9

膝高（左）　6.3　　膝高（右）　6.2

坐　奥　　25.8

2. 左脇侍　日光菩薩立像

像　高　　38.5（一尺二寸七分）

髪際高　　35.6（一尺一寸七分）

頂―顎	7.3	面　長	4.5
面　幅	4.8	耳　張	5.4
面　奥	6.2	胸　奥	7.0
腹　奥	8.6	肘　張	13.3
袖裾張	15.7	裙裾張	11.6
裾　奥	8.5	足先開	6.8

3. 右脇侍　月光菩薩立像

像　高　　37.7（一尺二寸四分）

髪際高　　35.8（一尺一寸八分）

頂―顎	7.5	面　長	5.2
面　幅	4.7	耳　張	5.5
面　奥	6.0	胸　奥	6.1
腹　奥	7.8	肘　張	12.6
袖裾張	13.2	裙裾張	11.5
裾　奥	7.2	足先開	8.1

〔品質構造〕

1. 中尊　薬師如来坐像

檜。割矧（わりは）ぎ造り。彩色（現状素地）。玉眼嵌入（かんにゅう）。

頭体幹部は両耳後ろを通る線で前後に割矧ぎ（割って接合する）、内刳（うちぐ）りを施す。三道下で割首する。体幹部前面材には像心束を彫り残す。また体幹部材には両腰脇辺に前後束を彫り残す。この体幹部材に、別材の両体側部、両脚部、両前膊半ば以下を覆う袖部（脚部の上まで）、裳先、両手先を矧付（はぎつ）ける。

内刳り面は素地。像表面は現状素地だが、白下地と漆が所々に残る。

頭髪に群青、唇に朱彩。眉や口髭を墨で描く。玉眼は瞳を黒であらわし朱で縁取る。白眼白。目尻を青くぼかす。

2. 左脇侍　日光菩薩立像

檜。寄木造り。彩色（現状素地）。玉眼嵌入。

頭体幹部はともに前後二材矧ぎで、内刳りを施す。頭部は、右側では耳の半ばを通る線、左側では耳の後ろを通る線で前後に割矧ぐ。ただし頭部の割矧ぎ線と体幹部のそれは通じていない。三道下で挿首する（三道下に不整形の材を当てる）。体幹部は右肩を含んで前後に割矧ぐ。これに同材の左体側部を矧ぐ。左体側部はさらに袖も含んで前後三材に割矧ぐ。両足裏に足枘（ほぞ）を造り出す。両手先および両足先に別材を矧ぐ。

像表面は現状素地だが、白下地と漆が所々に残り、像底には白下地の上に朱や緑が残る。唇に朱彩。額のおくれ毛・眉・口髭を墨で描く。玉眼は瞳を黒であらわす。白眼白。

3. 右脇侍　月光菩薩立像

檜。割矧ぎ造り。彩色（現状素地）。玉眼嵌入。

頭部は両耳の後ろと後頭部の二か所で前後に割矧ぎ、体幹部は後頭部の割矧ぎと通じる線で、両肩を含んで前後に割矧ぐ。内刳りを施し、三道下で割首する。両足裏に足枘を造り出す。両手先および両足先に別材を矧ぐ。

像表面は現状素地だが、白下地と漆が所々に残る。唇に朱彩。額のおくれ毛・眉・口髭を墨で描く。玉眼は瞳を黒であらわし朱で縁取る。白眼白。目尻を青くぼかす。

〔保存状態〕

1. 中尊　薬師如来坐像

白毫（水晶製）、両手先、薬壺、裳先、像表面に残る彩色・墨書きのすべて、光背（木製、円形、漆箔・彩色）、台座（檜、蓮華座、漆箔・彩色）、以上後補。

2. 左脇侍　日光菩薩立像

高髻を亡失。玉眼、右目の上瞼の一部、両手先、未開敷蓮華、両足先（左足先裏の枘）、像表面に残る彩色・墨書きのすべて、台座（檜、方形の岩座の上に蓮華座、現状素地）、以上後補。

3. 右脇侍　月光菩薩立像

高髻を亡失。両手先、右袖一部の補材、両足先、像表面に残る彩色・墨書きのすべて、台座（檜、方形の岩座の上に蓮華座、現状素地）、以上後補。

三、薬師堂薬師三尊像に関する史料

薬師堂薬師三尊像については、下記の４つの史料に記述がみえる。

①『飛州志』巻８（享保年間・1744～48年成立、長谷川忠崇著）[1]

横河山安寧寺跡

吉城郡吉城郷半田村ニアリ、里人曰、往古本尊薬師如来、今同郡西門前村現在太平山安国寺ノ境内ニ安置シテ横河薬師ト称ス是也

（要約）

横河山安寧寺跡は吉城郡吉城郷半田村にあり、里人がいうには、その昔本尊だった薬師如来像は、今は同郡西門前村の太平山安国寺の境内に安置され、横河薬師と呼ばれている。

②明和９年（1772）４月「横川山旧跡記（写）」（安国寺轍外和尚著、渡辺市兵衛家文書）[2]

当寺山後之堂在薬師如来並日光菩薩・月光菩薩行基菩薩之手彫也、元是吉城郡吉城郷半田村横川古刹之本尊也（後略）

（要約）

安国寺の山後の堂（本堂裏手の薬師堂）に薬師如来像ならびに日光・月光菩薩像があり、それは行基菩薩が手ずから彫ったもので、もとは吉城郡吉城郷半田村の横川古刹の本尊であった。

③安永７年（1778）閏７月「横河山安養寺旧跡記木札」（安国寺所蔵）[3]

横河山安養寺旧跡記

夫原此山者、従古吉城郡半田村之地而、号山於横河、称寺於安養、雖為繁栄嗟時哉、懸兵火、當（堂）塔悉煨燼矣、存者本尊薬師如来・日光・月光両菩薩也、旹寛文五乙巳稔初夏、安国創建南臾大和尚、則寺之傍造建芳（茅）屋而移置之（後略）

（要約）

この山寺は古くから吉城郡半田村の地にあり、横河山と号し安養寺と称した。寺院は繁栄していたが、兵火にかかり、堂塔は悉く灰燼に帰してしまった。辛うじて本尊の薬師如来・日光・月光両菩薩の三尊像が残った。寛文５年（1665）に安国寺の南臾大和尚が、寺の傍に茅屋（茅葺の建物）を建ててこの三尊像を移した。

④『飛州志』巻５「安国寺」項、「横河薬師堂棟札」銘（安国寺南臾和尚著、寛文５年・1665年）[4]

夫以東方医王仏并両尊、扶桑国日之出所飛州吉城郡荒城郷元是横川古刹之本尊也、当国錯乱已後没蹤跡底也、当山前住聞焉見焉、感歎不少矣、左右門前対談于老翁等、這故庶民点頭矣、開当寺傍於半間茅屋移三仏本尊、予伝聞、年乎矣月乎矣、近年茅屋故損、木仏分離矣、山野関内

蒼住等勧之修造。（中略）旹寛文巳年初夏吉鳥、前住妙心現住安国南臾並寥筆

（要約）

安国寺薬師堂の薬師如来および両脇侍像は、もとは我が国飛州吉城郡荒城郷にある横川古刹の本尊であった。戦乱により横川古刹が廃絶となってしまい、辛うじて残された本尊像の状況を歎いた安国寺の前住職が寺の傍に半間の茅屋（茅葺の建物）をつくって薬師三尊像を移したと、私（南臾和尚）は伝え聞いた。近年、薬師堂が茅屋ゆえに、木造の仏像が分離する状態となったため、薬師堂を修造した。寛文巳年すなわち寛文５年、安国寺南臾が記す。

以上の４つの史料から、次のことが読み取れる。

・安国寺薬師堂の薬師三尊像は、もとは安国寺から2kmほど離れた吉城郡吉城郷半田村の横河（川）古刹の本尊像であった。その像には行基菩薩が手ずから彫ったという伝承があった。

・横河古刹については、史料①『飛州志』では横河山安寧寺、史料③の安国寺所蔵の木札には横河山安養寺と記され、二つの寺号がみえる。安国寺住職の堀祥岳師によると、「安寧寺」は『飛州志』を典拠とし、「安養寺」は安永年間前半に渡辺家周辺で通用し始めたものと想定できるという[(5)]。両者とも同一寺院を指している。

・横河古刹（安寧寺または安養寺）は戦乱期に兵火にかかって灰燼に帰したが、本尊の薬師如来・日光・月光菩薩の三尊像は焼け残った。この状況を歎いた安国寺の前住職が寺の傍に茅葺の堂（本堂の裏手の薬師堂）を建てて、薬師三尊像を移したという。移坐した年代については、史料③に「寛文５年」とみえるが、史料④には寛文５年に南臾和尚自身が「前住職」が移坐したと伝え聞いたとあることから、それ以前であったことになろう。「前住職」について堀祥岳師は、たとえば天正～慶長年間の記録にみえる春徳和尚などを想定している。

・寛文５年頃、薬師堂が茅葺の建物であったことから、木造薬師三尊像が分離する状態（接着していた部分が取れた、あるいは壊れたか）となり、薬師堂を修造した。「渡辺市兵衛家文書」によると[(6)]、安永７年（1778）７月にも高山役所に薬師堂修復に関する願書が提出されているから、薬師堂はたびたび修復されたことがうかがえる。現在の薬師堂は安国寺本堂の西、向かって左側に建っている。

四、考察

このたび調査した薬師堂の薬師三尊像は、もと吉城郡吉城郷半田村の横河古刹（安寧寺または安養寺）の本尊像であり、戦国時代に兵火で横河古刹が失われたのち、安国寺前住職が寛文５年以前に安国寺境内に茅葺の建物（薬師堂）を建て、三尊像を移坐したことが確認できた。三尊像を安国寺に移した後も薬師堂を修理しつつ、三尊像を大切に守り伝えてきたことがわかる。

今回の調査では薬師三尊像から銘文は見つからなかったが、像容や技法などから三尊像のおお

よその製作年代を導き出すことは可能である。以下、年代について検討していく。

まず薬師三尊像のうちの中尊薬師如来像をみると、頭部はやや面幅が広く四角い印象を受け、体部も肩幅のある四角いフォルムとなっている。また左胸前に衣の折返しをつくり、脚部の衣文にうねりのある曲線を多用している点も特徴的である。両脇侍像の頭部も四角い形状であり、衣の折返しも日光菩薩像では右胸前に、月光菩薩像では左胸前にあらわされている。これら三尊像にみられる特徴は、いずれも南北朝時代の院派仏師の仏像に顕著なものとして知られている。さらに、薬師如来像の像底をみると、両腰脇の辺りに彫り出しの束をつくり、これを前後に連結し（前後束）、さらに体幹部の前面材から像底に像心束を下ろし、安定を図っている。こうした独特な構造もまた南北朝時代以来の院派仏師の仏像にみられるものである。以上、薬師堂の薬師三尊像は、像容・技法から検討すると院派系統の仏師による造像と考えられる。

同じく安国寺の本堂には、院派系統の仏師による本尊釈迦三尊像が安置されている。台座の銘によると、この三尊像は延文２年（1357）に大仏師駿河法眼定範と仏師印昌、朝範が造立したものであるという。今から30年近く前に安国寺の仏像調査をされた清水眞澄氏は、本堂の釈迦三尊像の作者、駿河法眼定範は作風、造像技法からみて院派系統の仏師であると推定し、印昌は院昌とも読めることを指摘した。また院派仏師が足利将軍の菩提寺等持院の仏師となるなど足利尊氏・直義との関係が深かったことから、足利尊氏にかかわる飛騨国安国寺の本尊も院派系統の仏師の作であった可能性があることを述べる(7)。清水氏の指摘のとおり、本堂の釈迦三尊像は南北朝時代の典型的な院派仏師の特徴を示しているといえよう。

この釈迦三尊像と薬師堂の薬師三尊像を比べると（図23･24）、像容と技法に共通性はあるものの、薬師如来像の方がずいぶん穏やかな印象を受ける。たとえば薬師像の頬はふっくらと丸みがあり、肩幅も四角いフォルムではありながらも、釈迦如来像よりも角が取れて、ラインが緩やかとなっている。また薬師像のプロポーションは、肉髻が低く、全体的に坐高も低いため、釈迦像よりも寸が詰まっているように見える。薬師堂の日光・月光の両脇侍像の着衣の彫りも、本堂の三尊像よりも厚くなっている。

以上から薬師堂の薬師三尊像は、延文２年（1357）に製作された釈迦三尊像よりも時代が下るのは間違いなく、南北朝時代末から室町時代にかけての造像と推定される。清水眞澄氏が30年ほど前の調査で、薬師堂の三尊像の製作年代を14世紀末から15世紀初頭と推定していたが、今回の調査でもほぼ同様の年代を導き出すことができた。

安国寺の仏像は多くが文化財に指定されているが、薬師堂の薬師三尊像は現在未指定である。本来は安国寺の仏像ではなかったが、横河古刹が戦乱期に焼失して以後、長きにわたり安国寺で守ってきた像である。しかも、三尊像の製作年代は今回の調査によって南北朝時代末から室町時代初頭にかけての頃と推測でき、今から600年以上も前の仏像と考えられる。現在、三尊像は当初の彩色が失われ、両手・両足先などが後補になってはいるが、その他はほとんどが当初のもの

で、保存状態は特段悪いわけではない。

しかも横河古刹は安国寺から 2 キロほどしか離れておらず、薬師三尊像が移動したとはいえ、同じ地域で守られてきた仏像として貴重である。また戦国期に失われた横河古刹の創建年代も、薬師三尊像（横河古刹の旧本尊）が南北朝時代末頃まで遡りうることからすると、おおよそその頃に建立されたかと推測される。安国寺が創建されたのは貞和 3 年（1347）で、本堂の本尊釈迦三尊像が造立されたのが延文 2 年（1357）であった。14 世紀半ば頃に安国寺が今の場所に創建され、半世紀のちには安国寺のほど近くに横河古刹が営まれ、このたび調査した薬師三尊像が本尊として造立、安置されたのであろう。

以上のように、この薬師三尊像は、今は亡き横河古刹の歴史、ひいてはこの地域の歴史や信仰を語る上で重要な像といえる。今後、高山市の指定文化財を目指し、検討されるにふさわしい像である。

最後に、今回の仏像調査を公開講座で実施したことについて考えてみたい。

五、仏像調査の公開

冒頭でも述べたように、調査は 2023 年 3 月 29 日に、こくふ歴まちネット主催「国府遺産コミュニケーター」養成講座の一環として行われた。こくふ歴まちネットの代表であり、安国寺現住職でもある堀祥岳師が作成したチラシをみると（図 27）、「未指定文化財調査の現場に立ち会う」というキャッチコピーで、第 1 弾が 3 月 18 日に寺院建築「安国寺本堂の年代調査」として行われ、第 2 弾が 3 月 29 日に仏像「安国寺薬師堂薬師三尊像の調査」として実施された。

まず仏像調査は、下記の流れで行うことが多い。

①仏像を壇上から下ろし、調査場所へ移動する。

②像の寸法を測定し、記録する（法量測定）。

③像の表面観察を行う（形状、品質構造、保存状況の確認・記録）。

④像底の観察を行う（品質構造等の確認・記録）。

⑤写真撮影を行う。

①の仏像の移動は、調査の前日に安国寺を訪問し、薬師堂の薬師三尊像をすでに本堂へ移動しておいた。講座の参加者から見やすいように、長方形の台の上に仏像 3 躯を並べ置くことにした（図 25）。講座当日は、調査の流れの②～④を見てもらうことになった。

仏像調査は多くの場合、美術史（とくに彫刻史）を専門とする人が行う。つまり美術史を専門とする大学教員や学芸員、各自治体の文化財保護審議会委員、文化財修復に携わる人などが仏像調査を行っている。調査が行われるのはたいてい寺院であるから、一般の人が調査の現場を目にすることはほとんどない。また仏像調査では、像を壊さないように取り扱いには最善の注意を払う必要があり、さらに調査後に報告書を起こすことから調書に漏れがないように相当の集中力を

要する。仏像の写真撮影においても、仏像の移動を伴ううえ、ピントのあった綺麗な写真でなければ報告書の作成の際に困ることから、撮影時はミスは許されないという気持ちで常に緊張する。したがって、今回の仏像調査を一部公開で実施することには不安がなかったわけではない。しかし結果的には、地域の方々に仏像調査の一部を見ていただき、地域の仏像に興味・関心をもってもらえたのは、文化財を後世に伝えていくうえで大切なことであったと実感した。

講座当日、参加者には本堂に置かれた3躯の仏像の周りに座ってもらい、仏像のどの部分を測定するのか、また像の構造や技法はどこを見て判断するのか、適宜レクチャーしながら調査を進めた（図26）。参加者の中には修復家の方もおり、まさにこの薬師三尊像を過去に修理したというので、像の後補箇所について解説をお願いした。一般の方にとっては仏像を間近に見ること自体も貴重な体験であったと思われるが、とくに薬師如来坐像の像底を一人ずつ順にのぞき込んでもらい、頭頂の矧ぎ目や、院派仏師に特有の像心束や前後束を見てもらった際には歓声があがった。新しいものを発見した喜びの声だったように思う。あっという間の90分で、好評のうちに講座は終了した。参加者が帰った後、静まりかえった本堂内で三尊像の写真撮影を実施した。撮影は3躯を全方向から撮影するので、2時間以上の時間を要し、夕方16：00頃にすべての調査が終了した。

おわりに

今日、仏像の写真や動画はインターネット上にあふれている。仏像の展覧会などでも、開催に先立って寺院から仏像を運び出す様子を動画等で公開したり、修理する仏像の様子を公開することも珍しくなくなった。十数年前に比べても仏像の情報ははるかに入手しやすくなっている。このように仏像の情報があふれている今日にあっても、仏像調査の場面に立ち会う講座は他に聞いたことがなく、新しい試みであったと評価したい。今後は、仏像や文化財を後世に伝えていくために、次の時代を担う若い世代の人たちに参加を呼び掛けることも重要になってくるだろう。

たとえば、2023年の4月8日の花まつりの日に、高知県香南市の長谷寺の仁王像を修理する「よしだ造佛所」に小中学生15名が集まり、墨書イベント「1000ねんごのきみへ」が開催された。子供たちは修理中の大きな仁王像を目の前にして、未来に伝えたいことを紙に墨書きし、それを完成した仁王像の胎内に納めて未来に届けるという企画であった。これは子供たちが仏像を身近に感じ、自分の書いたメッセージとともに仏像を後世に伝えていく気持ちを育む、とてもよい企画であったといえよう[(8)]。

また静岡県浜松市北区の林慶寺では、寺院が所在する滝沢地区を学区とする浜松市立都田小学校の子供たちを招いて特別授業を例年実施しているという。浜松市美術館の島口直弥学芸員は「林慶寺像をはじめとした地域伝来の仏像は、地域における遠足や校外学習で子供たちの本物の文化や芸術に直接触れる機会を保証し、それらに慣れ親しみながら、伝統文化の継承に寄与しよ

うとする態度を育むための絶好の教育資源といえる」と述べる[(9)]。つまり、地域伝来の仏像がその地域に暮らす子供たちの教育資源になるという。

こうした新しい試みが日本各地で始まっている。私自身も微力ながら文化財を後世に伝えていくためにできることから実践していきたい。

〔註〕

(1) 長谷川忠崇『飛州志』（岡村利平編、住伊書店、1909 年）。『飛州志』は飛騨の代官であった長谷川忠崇が享保年間（1744～48 年）編纂した地誌。

(2) 「渡辺市兵衛家文書」は堀祥岳師の論考「国府町半田「横河山」に遺る石仏・石造物の紹介―飛騨で最も早い大原騒動供養塔の発見―」（『濃飛史艸』第 129 号、岐阜県歴史資料保存協会、2022 年 1 月 14 日発行）を参照。

(3) 安国寺が所蔵する木札で、現存する。

(4) 「横河薬師堂棟札」銘は安国寺薬師堂の棟札銘のことで、寛文 5 年に安国寺南臾和尚が記したもの。棟札は現存せず、『飛州志』巻 5（岡村利平編、住伊書店、1909 年）に収録された写しを参照した。

(5) 前掲（2）堀祥岳師論考。

(6) 『国府町史 史料編Ⅰ』332・333 号（国府町史刊行委員会、2008 年）

(7) 清水眞澄「岐阜・安国寺の彫刻と歴史」（『上原和博士古稀記念美術史論集』、中央公論事業出版、1995 年）

(8) 「よしだ造佛所」HP・2023 年 4 月 16 日ブログ　花まつり企画「1000 ねんごのきみへ」

(9) 島口直弥「地域伝来の仏像の教育資源としての有用性―林慶寺の大日如来坐像と都田小学校の子供たち―」（浜松市美術館・展覧会図録『みほとけのキセキⅡ―遠州・三河のしられざる祈り―』、みほとけ実行委員会、2023 年 10 月）

〔図版出典〕

図 1～23　調査当日に高橋寛が撮影。

図 24　前掲註 7 清水眞澄氏論文。

図 25・26　調査当日に筆者撮影。

図 27　講座のチラシコピー。

〔付記〕

本研究報告は、令和 5 年度（2023 年度）の科学研究費補助金・基盤研究（C）「愛知県の仏像に関する調査研究―伝播と移動に注目して―」の研究成果の一部です。高山市安国寺の仏像調査に当たっては住職の堀祥岳師にお世話になりました。ここに記してお礼申し上げます。

図 2　薬師如来坐像　正面

図 3　薬師如来坐像 右斜側面

図 4　薬師如来坐像 背面

図 5　薬師如来坐像 右側面

図 6　薬師如来坐像 左側面

図７　薬師如来坐像 像底

図８　薬師如来坐像 像底（部分）

図 9　日光菩薩立像 正面

図 10　日光菩薩立像 右斜側面

図 11　日光菩薩立像 背面

図 12　日光菩薩立像 右側面

図 13　日光菩薩立像 左側面

図 14　日光菩薩立像 像底（正面）

図 15　日光菩薩立像 像底（斜め）

図 16　月光菩薩立像 正面

図 17　月光菩薩立像 左斜側面

図 18　月光菩薩立像 背面

図 19　月光菩薩立像 右側面

図 20　月光菩薩立像 左側面

図 21　月光菩薩立像 像底（正面）

図 22　月光菩薩立像 像底（斜め）

図 23　薬師堂・薬師如来坐像

図 24　本堂・釈迦如来坐像

図 25　本堂に移動した薬師三尊像

図 26　講座・調査の風景

こくふ歴まちネット 主催
「国府遺産コミュニケーター」養成講座
国府地域の歴史文化遺産＝《国府遺産》を説明案内できる"語りべ"を養成する講座です。
文化財の魅力や歴史・文化の奥深さをわかりやすく伝えられる人材の育成をめざします。
未指定文化財調査の現場に立ち会う
第1弾
令和5年
3/18 土
13:30～15:00
会場：安国寺本堂
20名募集（先着順）
寺院建築
「安国寺本堂の年代調査」
講師：愛知工業大学 杉野丞教授
建立年代が明確でない安国寺本堂について、建築史学の立場から、禅宗建築（本堂）の年代を判定する場合に、どこに注目するかを現地で解説いただきます。
安国寺本堂須弥壇
第2弾
仏像
「安国寺薬師堂 薬師三尊像の調査」
講師：東海学園大学 小野佳代教授
令和5年
3/29 水
薬師三尊像の調査現場を公開します。法量測定・観察・調書作成といった調査過程を見学いただき、先生からも必要に応じて解説いただきます。
10:00～11:30
会場：安国寺本堂
15名募集（先着順）
安国寺薬師堂 薬師如来像
要事前申込
参加無料
問い合わせ先：こくふ歴まちネット 代表 堀 祥岳 090-2555-4509

図 27　講座のチラシ